

ASD の子どもと他の子どもたちの 豊かなつながりを築く その2 小学校中学年



くすのき ひろゆき / 1960年、大阪生まれ。専門は、いじめ、不登校、発達障害の問題に焦点をあてた臨床教育学。著書に、『保育と教育のための発達診断』（全障研出版部、共著）『自閉症スペクトラム障害の子どもへの発達援助と学級づくり』（高文研）、『いじめと児童虐待の臨床教育学』（ミネルヴァ書房）など

つて突然、他者が自分をどう思っているかに気づく。その気づきが突然であるため、気づきの内容が他者のネガティブな評価である場合、定型発達児とは比較にならないほど激しい疎外感や孤独感を感じやすい。これが自尊心を低めることにつながるのである」と述べています。（別府・小島編 P.135）

2. 実践紹介 ヒロト君（小4）への取り組み

ここでは、神奈川の前田先生の取り組みを紹介します。4年生の時には頻繁にパニックを起こし、仲間集団から排除されていたヒロト君。4年生当初もヒロト君は頻繁にパニックをくり返します。ヒロト君のパニックは、小さなつぶやきから始まることもあれば、いきなり大声で叫ぶこともありました。物を投げたり、寝転んだり、階段の手すりにのぼろうとしたり、自分の首をしめたり…その様態はさまざまでしたが、とにかく頻繁で、周囲の子どもたちは、「また、ヒロトか」とうんざりした表情でヒロト君のパニックを眺めていました。

しかし、なかにはヒロト君の言動に対して露骨にいらだつ子もいて、「うるせえんだよ」とつぶやいたり、「いい加減にしろよ！」と怒鳴ったりしていました。原田先生はその子には「私も同感だよ」とそっと伝えました。たとえ否定的な反応であったとしても、ヒロト君にまっすぐに向き合う姿勢をその子どもが示してくれていたからです。

4月の個人面談で、ヒロト君の母は、「お母さん、いままで本当に大変でしたね」と原田先生が語りかけたときから面談が終わるまで、ずっと泣き通しだったそうです。

発達障害に対する 理解と支援

—自閉症スペクトラム障害に視点をあてて (ASD)



楠 凡之

北九州市立大学

1. 小学校中学年の発達の特徵と ASDの子どもたち

小学校中学年は通常の場合、「9・10歳の発達の節目」の時期であり、具体的思考から抽象的思考へと離陸していく時期であるとされています。田中昌人氏はこの時期を「変換可逆操作の階層」への飛躍的移行の時期としました。

田中氏はこの時期に「集団的自己」が誕生してくるとしています。すなわち、仲間集団で徒党を組み、仲間の掟や「秘密の世界」を創造したり、「我々意識」が強まり、行事の計画などの際にも、「大人の手を借りずに自分たちの手でやりとげたい」という意欲が育まれ、自分たちでひとつの取り組みをやり遂げた時には「自分たちの力でやれたんだ」という集団的な「自己効力感」を育んでいくのです。

それと同時に、この「自分たちが」という我々意識の強まりは集団のウチとソトの意識を強め、グループ間の集団的対立に発展したり、ASDの子どもなどへの「異質性の排除」としてのいじめを生み出す危険性が高まっていく点にも留意する必要があるでしょう。別府哲氏も、9・10歳の節を越える時期の子ども集団は「同化・排除」の論理を強くもちやすいことを指摘しています。（別府哲・小島道生編 P.157）

その一方で、この時期は他者への多面的な理解が育まれていく時期であり、それぞれの子どもたちがさまざまな活動に参加し、多面的なかたちでお互いを肯定的に評価し合えるような機会を保障していくことも重要です。

ところで、知的障害を伴わないASDの子どもの場合、この頃から「心の理論」の獲得が始まり、自分とは異なる他者の見え方、感じ方が理解できるようになってきます。しかし、そのことがかえって他者からの評価に過敏になり、否定的な感じ方を強めてしまう場合もあります。

別府氏も、「高機能自閉症児はそのような直感的に感じる力（「心の理論」・引用者注）が弱いまま、9歳過ぎにな